

ここにいるわたし達だ

6月23日、沖縄戦から76年の「慰霊の日」。糸満市の平和記念公園で、戦没者追悼式が開かれました。今年の「平和の詩」の朗読者は、1500点の応募から選ばれた中2の上原美春さん。「みるく世」は沖縄で「平和の世」を意味します。私はこの詩を初めて読んだとき、作者である上原さんの心の底からわき上がってくる、「伝えたい」「伝えなければ」という思いそして「引き継ぐべき存在」としての自覚から紡ぎ出された言葉の一つ一つから、「平和の大切さ」や「現在の平和の礎となった多くの方々の存在」を強く感じました。戦争を体験された方々が少なくなってきた現在、私たちは「想像する力」を精一杯駆使しながら、平和な世の中を創り上げていく努力を続けていかなければならないと思います。

みるく^ゆ世^{うた}の謳 宮古島市立西辺中 2年 上原 美春

12歳。初めて命の芽吹きを見た。
生まれたばかりの姪は小さな胸を上下させ
手足を一生懸命に動かし 瞳に湖を閉じ込めて
「おなかすいたよ」「オムツを替えて」と
カー杯、声の限りに訴える
大きな泣き声をそっと抱き寄せられる今日は平和だと思ふ。
赤ちゃんの泣き声を愛しく思える今日は穏やかかであると思ふ。

その可愛らしい重みを胸に抱き 6月の蒼天を仰いだ時
一面の青を分断するセスナにのって
私の思いは76年の時を超えていく

この空はきっと覚えている
母の子守唄が 空襲警報に消された出来事を
灯されたばかりの命が消されていく瞬間を

吹き抜けるこの風は覚えている
うちなぐち※1を取り上げられた沖縄を
自らに混じった鉄の匂いを

※1 沖縄言葉

踏みしめるこの土は覚えている
まだ幼さの残る手に 銃を握らされた少年がいた事
おかえりを聞くことなく 散った父の最後の叫びを

私は知っている
礎(いしじ)を撫でるしわの手が 何度も拭ってきた涙

あなたは知っている あれは現実だったこと
きらびやかなサンゴ礁の底に 深く沈められつつある
悲しみが存在することを

凜と立つガジュマルが言う
忘れるな、本当にあったのだ
暗くしめった壕の中が 憎しみで満たされた日が
本当にあったのだ

漆黒の空 屍(しかばね)を避けて逃げた日が
本当にあったのだ
血色の海 いくつもの生きるべき命の 大きな鼓動が
岩を打つ波にかき消され 万歳と投げ打たれた日が
本当にあったのだと

6月を彩る**月桃(げっとう)※2**が揺蕩(たゆた)う

忘れないで、犠牲になっていい命など
あつて良かったはずがない事を
忘れないで、壊すのは、簡単だという事を
もろく、危うく、だからこそ守るべきこの暮らしを

※2 沖縄の山野に自生
するショウガ科の植物

忘れないで 誰もが平和を祈っていた事を
どうか忘れないで 生きることの喜び
あなたは生かされているのよと

いま**摩文仁(まぶに)※3**の丘に立ち 私は歌いたい

澄んだ酸素を肺いっぱいにとりこみ
今日生きている喜びを 震える声帯に感じて
決意の声高らかに

※3 沖縄戦終焉地
平和記念公園や
平和の礎がある

みるく世ぬならば世や直れ※4

平和な世界は私たちがつくるのだ
共に立つあなたに 感じて欲しい
滾(たぎ)る血潮に流れる先人の想い

※4 平和な世の中がやっ
きて、みんなの暮らしが
よくなりますように。

共に立つあなたと 歌いたい
蒼穹(そうきゅう)※5へ響く癒しの歌
そよぐ島風にのせて 歌いたい
平和な未来へ届く魂の歌

※5 青空

私たちは忘れないこと
あの日の出来事を伝え続けること
繰り返さないこと
命の限り生きること
決意の歌を歌いたい



【朗読する上原さん】

いま摩文仁の丘に立ち
あの真太陽(まていだ)まで届けと祈る
みるく世ぬならば世や直れ
平和な世がやってくる
この世はきっと良くなっていくと 繋がれ続けてきたバトン
素晴らしい未来へと 信じ手渡されたバトン
生きとし生けるすべての尊い命のバトン

今、私たちの中にある
暗黒の過去を溶かすことなく
あの過ちに再び身を投じることなく
繋ぎ続けたい
みるく世を創るのはここにいるわたし達だ